ＡＯ入試エントリー者・合格者３ヵ年の比較分析

富　永　倫　彦

１．はじめに

山口大学ＡＯ入試は，平成14年度入学者選抜から経済・理・工の３学部で実施し，15年度選抜から人文・教育も参入して５学部の実施となった。選抜システムや選抜体制を年度ごとに変更し，よりよい選抜を行うための試行錯誤を重ねてきた。

本研究は，過去３ヵ年のＡＯ入試結果から，エントリー者・合格者がどのように変化してきたかを検証し，今後の選抜のあり方を研究する基礎資料とすることを目的として行ったものである。選抜の成否は，一定期間の追跡調査を経なければ判断できないが，現段階では選抜の現状を分析することによって，今後の広報戦略や選抜システム上の問題点を明らかにし，さらなる改善を加えることとしたい。

なお，医学部学士編入学試験においては，平成14年度編入学者選抜からＡＯ入試と称する選抜を実施しているが，本稿での分析対象からは除外した。

２．選抜のプロセス

表１に過去３ヵ年のＡＯ入試の選抜プロセスをまとめて示す。

２．１　平成14年度選抜のプロセス

表１のように，エントリー受付後，面談と体験授業を実施して総合的な評価判定を行い，再度の面談（進路指導）によって出願の適否（実質的な合否）を明確に伝えたところに14年度選抜の大きな特色がある。これは，出願者を合格候補者のみに絞ることによって受験者に受験料負担や拘束期間を軽減する配慮をしたものであるが，現実には，出願を促さなかったエントリー者の出願が３人あった。いずれも本人または高校側によって，エントリー段階である以上，出願することによって合格の可能性があると判断されたものである。この点にも配慮して次年度は選抜システムの改善を図った。

表1 選抜のプロセス比較

14年度	15年度	16年度
エントリー受付(7月12～17日)	エントリー受付(7月1～5日)	エントリー受付(7月7～10日)
▼	▼	▼
面談・体験授業(8月)	面談（一部、体験授業も実施）(7月下旬)	オープンキャンパス出席(8月6～8日)
▼	▼	▼
出願適否告知（面談）(8月下旬)		
▼		
出願(10月1～5日)	出願(8月12～16日)	出願(8月11～14日)
▼	▼	▼
	書類選考	書類選考
	▼	▼
	1次合格者発表(9月9日)	1次合格者発表(9月8日)
	▼	▼
面接試験(10月15～18日)	面接・講義等理解力試験(9月17～21日)	面接・講義等理解力試験(9月16～26日)
▼	▼	▼
合格者発表(11月15日)	合格者発表(10月22日)	合格者発表(10月22日)

２．２　平成15年度選抜のプロセス

人文学部・教育学部の新規参入によるエントリー者の増加が予測されたことと14年度の反省を踏まえて，エントリー段階での実質的な合否判定は行わないシステムに改めた（表１）。基本的に，エントリー段階での面談はミスマッチを回避する目的で行ったが，出願後の１次選抜（書類選考）の参考資料とするために評価も行った。出願後の１次選抜は，２次選抜での講義等理解力試験（14年度の体験授業とほぼ同内容）を実施するために３倍程度に絞り込む必要があったからである。

なお，エントリー段階での体験授業は，教育学部・経済学部のみで実施し，面談と同様に１次選抜の参考資料とした。

２．３　平成16年度選抜のプロセス

15年度の大幅なエントリー者増から，次年度以降も増加した場合には，エントリー段階における面談時間および面接官の確保が難しいと判断し，面談の趣旨を充足する新たな方策を採った。すなわち，エントリー時の面談の主たる目的は志望学部・学科のミスマッチを排除することであるから，その役割をオープンキャンパス（大学公開説明会）に委ね，エントリー者がオープンキャンパスに参加して自ら志望学部・学科が妥当であるかどうかを確認させることとした。しかし，学部によっては，台風の影響で当初予定した日程でのオープンキャンパスが開催不能となったため，出願要件としていたオープンキャンパスへの参加は事実上取りやめる結果となった。なお，出願後の選抜プロセスは，15年度選抜と同様である。

３．実施体制の変更

山口大学のAO入試は，実施初年度からアドミッション・オフィス機能を形成して実施している。すなわち，14年度選抜はAO入試を実施する組織として，入試実施専門委員会の下部組織として設置されたAO入試実施部会（実施学部選出教官とアドミッションセンター教官で構成）がその機能を果たした。15年度選抜，16年度選抜はこれを入試実施専門委員会の下部組織ではなくアドミッションセンター内のAO入試実施委員会として独立させ，非実施学部（医学部・農学部）から選出された教官も含めた全学的な委員会組織としてその役割を担った。

14年度選抜の体験授業および15年度，16年度選抜の講義等理解力試験については，当該学部の部会委員が中心となって各学部で実施したが，面談および面接試験の関わりについては14年度選抜と15年度，16年度選抜では異なる。14年度選抜の面談は当該学部の教官とアドミッションセンター教官で組織して行ったが，15年度選抜の面談・面接試験および16年度選抜の面接試験は，所属学部に関係なくAO入試実施委員会委員として他学部の面談・面接にも携わった。文字通り全学的なアドミッション・オフィスとしての機能を強化したものである。

なお，合格者の決定については過去３ヵ年ともAO入試実施部会（14年度選抜）およびAO入試実施委員会（15年度，16年度選抜）における判定結果を当該学部教授会が追認する方法をとった。

４．合否判定方法の変更

14年度選抜は，募集単位別に面談成績順名簿を作成し体験授業評価を併記した判定資料をもとに，当該学部の意向をも勘案しAO入試実施部会で判定した。したがって，学部・学科によっ

ては体験授業評価を重視する判定を行ったケースもあり，全学的な判定の一貫性は必ずしも保たれなかった。

15年度，16年度選抜は，これらの点を改善し，14年度選抜の体験授業に当たる講義等理解力試験と面接試験を均等評価にすることによって判定し，評価も双方各20点満点に統一して合算した。

５．エントリー者・出願者・合格者状況

学部別のAO入試結果を表２に示した。15年度選抜から5学部での実施となったため全体の募集人員は59人から75人と14年度選抜より16人増となり，さらに16年度選抜では理学部で２人，工学部で4人の募集人員増があり81人となった。エントリー者は３ヵ年で267人，608人，405人と推移した。

表2 学部別入試結果比較

学部	年度	募集人員	エントリー数	倍率	出願者数	合格者数	倍率
経済学部	14年度	20	112	5.6	22	22	1.0
	15年度	20	166	8.3	140	20	7.0
	16年度	20	112	5.6	98	19	5.2
理学部	14年度	9	25	2.8	14	13	1.1
	15年度	9	45	5.0	38	9	4.2
	16年度	11	27	2.5	22	9	2.4
工学部	14年度	30	130	4.3	42	40	1.1
	15年度	30	262	8.7	214	29	7.4
	16年度	34	140	4.1	123	23	5.3
人文学部	14年度						
	15年度	10	118	11.8	96	9	10.7
	16年度	10	109	10.9	98	10	9.8
教育学部	14年度						
	15年度	6	17	2.8	16	5	3.2
	16年度	6	17	2.8	13	6	2.2
合　計	14年度	59	267	4.5	78	75	1.0
	15年度	75	608	8.1	504	72	7.0
	16年度	81	405	5.0	354	67	5.3

14年度に比べて15年度エントリー者は2.28倍増，初年度から実施の3学部だけでも1.77倍増となった。15年度の大幅なエントリー者増は，14年度に比べて広報も行き届き，広く全国に認知された結果である。16年度は減少したが，15年度以上のエントリー者を抱えての実施はAO入試の理念であるきめ細かな選抜を阻害する可能性が予測されたことから，意図的にリーフレットやポスターなどの広報資材を作成せずに広報活動を控えことも一因かと考えられる。因みに，エントリー者の出身地は，14年度は愛知県以西であったが，15年度以降は北海道から沖縄県に及んでいる。

合格者は，14年度が募集人員を上回る75人としたのに対して15年度は募集人員を超えないことを前提に判定を行い，合否ライン上の同点者を不合格としたため募集人員より全体で３人下回った。16年度も同様に判定し募集人員81人に対して67人の合格者に絞り込んだ。因みに，合格者は３年間とも，全員が入学手続を完了した。

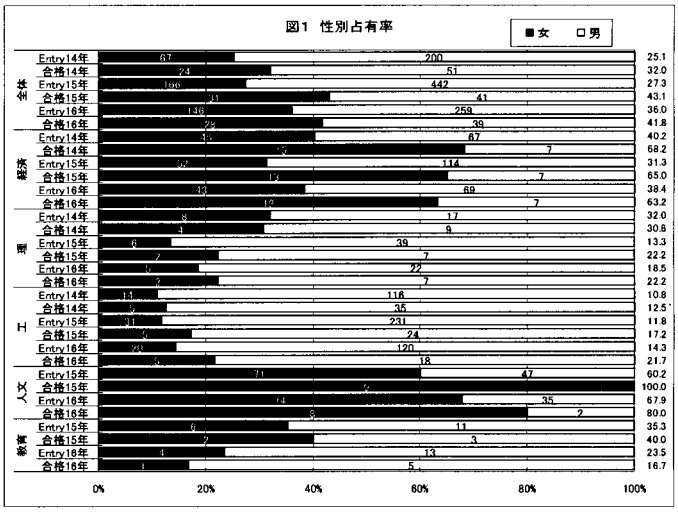
６．エントリー者と合格者の属性の変化

６．１　性別占有率

図１はエントリー者，合格者に占める男女の割合（占有率）を示したものである。グラフ中の数値は実人数で，グラフ右側に示した数値は女子の占有率である。エントリー者全体では女子の占有率は上昇傾向にあり，14年度25.1%，15年度27.3%，16年度36.0%と推移している。学部別では多少の変化が見られるものの，変化の大きい学部は女子の実人数が少ないことによる。

合格者においては，全体で32.0%，43.1%，41.8%と女子の占有率が推移し，明らかに女子

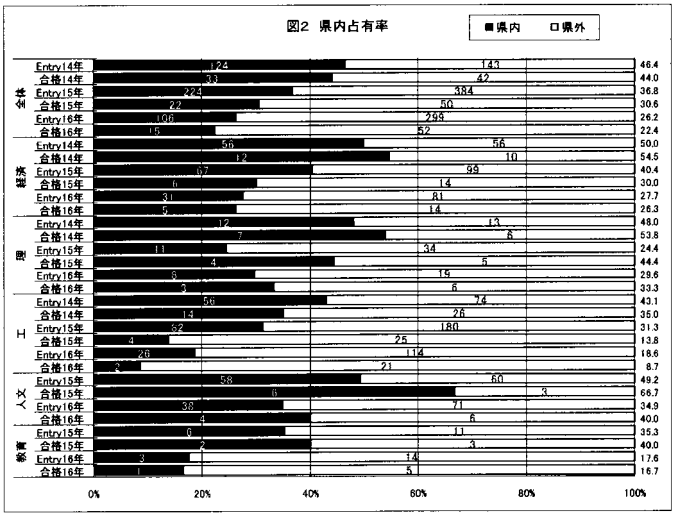
の合格率が高いことを示している。特に女子エントリー者の多い経済，人文で見てもエントリー段階における女子の比率は，合格段階において大幅に高めている。因みに当該募集単位全体の16年度前期日程における女子の占有率は，志願者で27.8%，合格者で28.8%であり，AO入試における女子の占有率は一般選抜よりも高く，合格率も高いことが明らかになっている。

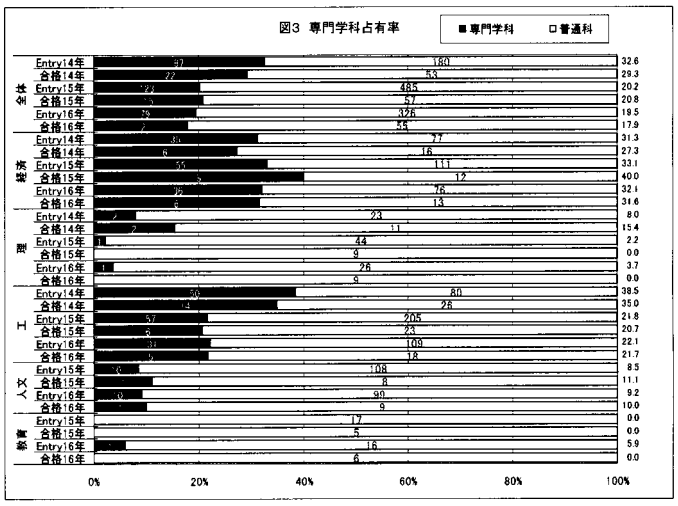


6．2　県内占有率

図2はエントリー者，合格者に占める県内高校出身者の割合である。エントリー者における県内占有率は，全体で46.4%，36.8%，26.2%と年度を経るごとに低下傾向にあり，受験エリアが拡大されてきたことを示している。

これに比例して，全体では合格者における県内占有率も低下しており，工学部においては県内勢の合格率が著しく低いことを示している。理学部，人文学部においては県内出身者の健闘が目立つ。因みに，16年度の一般選抜前期日程合格者とAO入試合格者における県内出身者占有率を比較すると，経済28.5%，26.3%，理19.6%，33.3%，工23.7%，8.7%，人文21.7%，40.0%，教育7.1%，16.7%で，経済，工における県内出身者の占有率は一般選抜よりも低い。





６．３　専門学科占有率

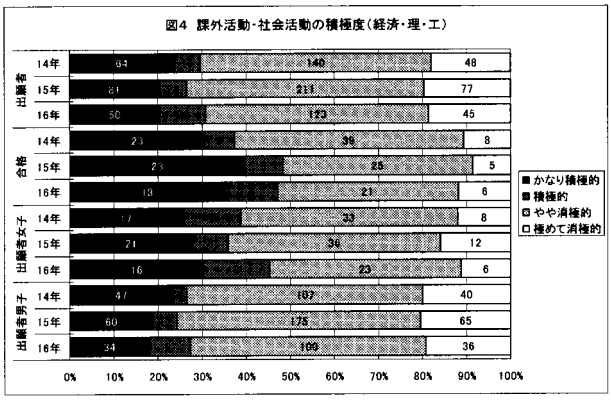
エントリー者および合格者の出身高校（科）によって専門学科と普通科を区別して示したのが図３である。エントリー者全体で見ると，14年度32.6%，15年度20.2%，16年度19.5%と低下傾向にある。特に専門学科出身者の多い経済，工のうち，工学部では，14年度と15年度の比較で16.7ポイントの大幅低下が見られるが，他は大きな変動はない。

合格者では，29.3%，20.8%，17.9%とエントリー者における占有率より14年度，16年度はやや低く，AO入試と言えども専門学科出身者が優位に立つとは言い難い。ただし，15年度の経済における専門学科出身者の健闘は顕著であり，これは図１から商業科出身者の女子の健闘によるものと考えられる。人数こそ少ないが人文でもやや優勢と言えよう。

なお，専門学科のうち理数科は普通科に含めて集計した。

６．４　課外活動・社会活動の積極度

14年度からAO入試を実施している経済，理，工の３学部の出願者，合格者について課外活動・社会活動の積極度を図4に示した。14年度はエントリー者についてエントリー票「課外活動・社会活動の経験と自己評価」欄の記述内容をもとに，15年度，16年度は出願者について志願票「自己アピール」欄の記述内容・調査書の記載内容をもとに，それぞれ課外活動・社会活動の実績について数値化した。生徒会長・部長経験者および全国レベル実績者（２点），メンバー参加者（１点），非活動者（０点）とし，課外活動，社会活動いずれか２点の者を「かなり積極的」，両方１点の者を「積極的」，いずれか１点の者を「やや消極的」，両方参加していない者を「極めて消極的」として評価・算出した。なお，これらの数値は点数化するなど合否判定には直接的に反映させていない。



その結果，出願者（14年度のみエントリー者）における積極的な活動実績を有する者の比率は，15年度にやや低下したものの16年度は高くなり，とりわけ女子の積極的活動者が増加している。いずれの年度も，合格者において積極的活動者の比率が高く，とりわけ，リーダーシップを評価した経済学部では合格者に積極的活動者が顕著で，生徒会長や部長経験者が多く見られた。

６．５　合格者の評定平均値分布

経済，理，工の３学部について，３ヵ年の合格者にみる評定平均値の分布を示したのが図５である。出願要件に評定平均値による制限は設けていないし合否判定にも直接的な利用はしていない。

３学部全体の平均は，14年度4.15，15年度4.27，16年度4.22で，学習成績概評Ａ段階(5.0～4.3)に属する者は，14年度49.3%，15年度58.6%，16年度58.8%を占めている。３ヵ年のＡ段階合

格者占有率の推移を学部別に見ると，経済64％→75％→53％，理31％→44％→67％，工48％→52％→61％と理学部，工学部ではＡ段階合格者が増加している。

専門学科出身者と普通科出身者の平均を比較すると，14年度は専門学科4.5，普通科4.0，15年度は専門学科4.6，普通科4.0，16年度は専門学科4.5，普通科4.1と，いずれの年度も専門学科出身者の評定平均値は高い。

なお，本項目においては，経済学部における商業関係学科，理学部における総合学科，工学部における工業関係学科を専門学科として集計した。

図5　合格者の評定平均値分布（経済・理・工）

評定平均値	14年度	15年度	16年度
5.0		○●	●
4.9	○○●	○○○○○●●	○○○○●
4.8	●	○○	○○●●
4.7	○○○○●●●●	○○○○●●●	○●●
4.6	○○○○○○●●●	○○○●●	○○●●●
4.5	○●●●●	○●●●	○
4.4	○○○●	○○○○●●	○○
4.3	○○○○○●●	○	○○○○○○○○○
4.2	○○○○●●	○○○	○
4.1	○○○○	○○○	○○
4.0	○●	○○○	○○
3.9	○○○	○	○○○
3.8	○○○○○○	○	○○○
3.7	○○	○○	○
3.6	○○○	○○○○	○
3.5	○○	○○	○
3.4	○○○○○	○	○○●●
3.3	○○○	○○○	○○
3.2			
3.1	○		
3.0	○		○
2.9以下		○	

人数（○普通科等　●専門学科）

７．面接試験と講義等理解力試験における評価の相関係数

＜４．合否判定方法の変更＞の項で述べたように，15年度選抜から面接試験と講義等理解力試験を各20点満点で均等評価している。２年間の各募集単位における両評価の相関係数を表３に示した。

一部の学科を除いて，概ね16年度における両者の相関は低くなっている。要因として考えられるのは，15年度は理系学部の中で，講義等理解力試験の結果を参考にしながら面接評価を行った学科があったため，16年度は面接試験を先に行い，翌日に講義等理解力試験を行うことによって独立した評価となるよう改善したことである。また，理系の学科では，教科の基礎学力を重視する観点から，調査書の成績を参考にしたり適性におよぶ質問等が面接でなされた学科もあり，結果として講義等理解力試験で見るべき資質を面接試験で評価した可能性が高いと考えられる。しかしながら，人文，教育，経済および工の一部の学科では，面接試験と講義等理解力試験で異なる視点から評価し，両方の試験を課す意義が見出される。

表3　面接評価と講義等理解力試験評価の相関係数

学部	学科・コース等	15年度	16年度
人文	人文社会	0.583	−0.068
	言語文化	0.327	0.048
教育	数理情報	0.251	0.184
経済	経Ⅰ	0.310	0.106
	経Ⅱ	0.260	−0.263
理	自然情報科学	0.811	0.828
	化学・地球科学	0.776	0.737
工	機械	0.592	0.508
	応用化学	0.442	−0.007
	社会建設	0.420	0.538
	電気電子	0.491	0.682
	知能情報システム	0.624	0.565
	機能材料	0.797	−0.217
	感性デザイン	0.922	0.067

８．総括と今後の課題

本稿は，３年間実施したAO入試の比較を属性を中心とした限られたデータによって分析したものである。以下に，特徴的な点をまとめて示す。

① エントリー者における女子の割合は年々増加傾向にあり，特に15年度から女子の多い人文の参入によって高い占有率を維持しつつある。しかも，合格者に占める女子の割合は，エントリー者に占める割合を上回り，自己表現力等が問われるAO入試では女子の合格率が高いとされる状況は，３年間の推移を見ても明らかである。

② エントリー者の県内占有率は低下傾向にあり，本学のAO入試が広く全国的に認知された結果である。このため，県外から優秀な受験者の流入によって県内受験者が劣勢となっていることが，合格者における県内出身者占有率から読み取れる。

③　AO入試と言えども専門学科出身者にとって必ずしも優位に働くとは言えないが，商業科出身の女子受験者の健闘は目立っている。

④　課外活動や社会活動への積極的参加は，面接を伴う選抜では優位に働くことが如実に表れており，これらの活動には女子のほうが積極的であることも顕著である。

⑤　調査書の評定平均値は合否判定に直接反映させていないが，合格者の評定平均値を比較する限りにおいて，受験者数が増えれば評定平均値の高い受験者を確保できるという入試のセオリーが検証される結果となっている。その意味で，高校間較差等の問題点はあるものの，ある程度調査書評価を選抜資料として機能させ得る可能性も考えられる。

⑥　面接試験評価と講義等理解力試験評価の相関を見ると，一部の学科を除いて文系学部と理系学部の差が現れている。入学後の適応能力を文系学部以上に重視する理系学部では，講義等理解力試験で見るべき適応能力を面接においても評価する傾向にある。

以上が，14年度から導入したAO入試結果に見る概要である。選抜のプロセスを毎年変更することには学内外からの批判もあろうが，AO入試はひとつの実験的選抜として入学者選抜全般の改善に向けて試行錯誤する目的も有していると考える。また，とかくAO入試は早期の選抜であるために青田買い等の批判もあるが，きめ細かな選抜を行うためには，マンパワーおよび設備の問題から夏休み等の長期休暇を利用せざるを得ないことについて，広報活動等を通して高校側の理解を得ることも必要であろう。

AO入試で受け入れた学生については，入学前教育セミナーおよび通信教材による指導を行ってはいるが，高校在学の身であることを考えればその指導には限界がある。入学後は，学力面での不足を問題視されることも多いが，従来の学力選抜では見出せない資質を評価して選抜するものであるから，当然，そのリスクは負わなければならない。単に学力面だけでAO入試の成否を論じることは無意味なことである。このような選抜によって入学した学生が，今後どのように成長し社会に有為な人材として輩出されるかが問われるべきである。

（アドミッションセンター　教授）

参考文献

富永倫彦（2002）『山口大学AO入試エントリー者の特性』「大学入試研究ジャーナル第13号」国立大学入学者選抜研究連絡協議会23-28

富永倫彦（2003）『AO入試1年目と2年目の比較分析＝エントリー者の増加で何が変わったか＝』「アドミッションセンター研究報告書」山口大学1-7

富永倫彦・大久保敦（2004）『高校調査書の利用実態に関する調査研究』「アドミッション･ポリシーと入学受入方策ー大学における学生の入学受入方策に関する総合的調査研究ー」大学入試センター75-104